

故 楠瀬正太郎先生の思い出

(社)日本都市計画学会副会長 伊藤 滋

本会の元会長楠瀬正太郎氏には平成4年2月13日永眠されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

社団法人 日本都市計画学会

私が楠瀬正太郎先生に会いましたのは、昭和33年の1月ごろです。どこで会ったかという、当時、山形市の都市計画を、県庁の人や市役所の人たちと一緒に、法で定める都市計画をつくるということで、東京から何人かの建設省の人たちが出張したのです。

そのときに、私は大学院の1年生で、当時、私の属していた東大の建築の高山研究室の助手で、その後、筑波大の教授をされた小島重二先生と一緒に、楠瀬さんたち建設省の人たちに随行したわけです。ちょうどいい機会だから、建設省の人たちが山形市の都市計画をつくるのを手伝いに行ったらいいというので、ついて行ったのです。後で小島重二先生は筑波大学の教授になったのです。

それが、上野駅を夜9時ぐらいの汽車に乗って、山形の駅に朝6時ごろ着いて、当時は東北本線で板谷峠を夜汽車でガタガタ行って、山形市はものすごく田舎で、駅も昔風の、石炭ストーブに石炭がくべられていて、ぼそぼそと火を焚いていて、ちょうど佃公彦の「ほのぼの君」の絵のような田舎の駅に降りたわけです。周りは雪がいっぱいでした。

そこで、都市計画の調査というのはどういうものかというのを、現場で楠瀬さんの指導で私は仕事をしたのです。それが大体3日ぐらいかかったと思います。私に割り当てられたのは、山形市にある工場の分布図をかけと。その工場はどういう工場かというのを、色鉛筆で、たとえば化学系の工場とか、繊維系の工場とか、機械系の工場とか、全部分布図をつくれと。そういう作業をしたわけです。

私は、何が何だか全然わからなかった。楠瀬さ

んは、ものすごく穏やかな方で、にこにこしながら、私が図面をつくっていくときも、これはこの色にした方がいいと——全部、都市計画で決められているのです。化学系の工場はこの色で塗りなさいとか、色の指定まで教えてくれて、一生懸命かいて、片方で楠瀬さんは、住宅がどういふところに建っているか、コンクリートの建物はどういふところに建っているか、全部、ほかの市役所の人たちに指示しながら、図面につくらせることを同時に指導しているわけです。

それから、当然、冬だけど、市街地の状況はどうかというのを、外を車で見ながら、克明にノートをして、市街地の状況はどうかと。それで、夕方帰ってくると、みんな集まって議論をするわけですが、山形市の人たちも県の人たちもお酒が大好きだから、お酒を飲んで夜、議論すると、みんないい調子になって、なかなかちゃんとした議論ができないうちに夜もふけてしまう。楠瀬さんは、それをにこにこしながら夜遅くまでちゃんとつき合って、それから「寝ましょう」と言って寝る。

翌日は、今度は山形市では人口がどういふふうになってきたかという人口の変わり方を克明に調べて、それも数字を表にしてくださいと。そういう一つ一つの部品をみんなに指示してつくらせるわけです。それで、でき上がったものを見ながら、「伊藤さん、こういふふうに山形でも新しいタイプの工場が出てきましたね」などという議論をしながら、その図面を見ているわけです。それで、都市計画の調査というのは、本当に大変な調査をするけれども、都市計画というのはなかなかうまく動かないんですよ」などという話をしていたりしたわけです。

私たちは、図面をつくってお酒を飲めば、それでくたびれてしまっただけで寝てしまう。気がついたら、最終の発つ日の朝になって、楠瀬さんが「山形市の都市計画をどういふふうにつくるかについ

て報告をしましょう」と言って、私たちをみんな前に集めて、メモがもうできているわけです。「これを残しておきますけれども、これに従って都市計画を立ててください」と、そのメモに基づいて全部話をするわけです。

そうすると、山形市の市街地の人口はこれから10年後はこれぐらいになると思います。その市街地の人口に見合う都市計画の用途地域として広げる山形市の面積はこれぐらいの大きさになります。その用途地域の面積のうち、工場はおおむねこの辺に分布しているから、工業地域はこれぐらいになります、商業地域はこれぐらいになりますとか、用途別の面積まで全部、理屈をきちんと立てて説明していく。

そして、街路網計画も一緒に法律でやっていたわけです。それは、別な建設省から来た土木系の技師がやっていたわけですが、その街路網計画と用途地域の図面を合わせて、全部一つに重ねると、山形市の都市計画は、これで昭和44、45年まで、10年ちょっとぐらいはこの用途地域と街路網の計画で大体いいでしょうと、非常に見事に、きちんと説明して、それに必要な図面はこれですと。この図面をもとにして、この図面の結果として、住宅の用途地域はこういう提案をした。工業系の用途地域はこういう提案をした。本当に構造的に、都市計画の組み立て方を聞いているだけで、なるほどスタートはこういうようなマクロな数字を押さえて、それから全体の都市計画の用途区域はこういうふうにして、面積を決めて、そのときには人口から就業人口を出し、就業人口一人当たりの用地面積を出すとか、なるほどこういうふうにして都市計画というのは組み立てていくものだなというのが理路整然とわかる。そういう説明を1時間半ぐらいされました。

それで、汽車が出るというので、「皆さん、ご苦労さまでした」と言って私たちを連れて帰ったんだけど、楠瀬さんはその報告書を一体いつ書いていたか。私は当時不思議で、私たちと12時過ぎまでお酒を飲んで、朝はちゃんにご飯を食べていて、いつ書いたのだろうと。結局、楠瀬さんは、寝る時間を使って全部まとめていたわけ。ものすごく芯が強くて、それから私は、楠瀬さんというのは法定都市計画を組み立てる神様だと思っています。

ます。人柄もものすごくいい人で、穏やかです。私は、その経験が楠瀬さんの一番初めの強烈な印象なんです。

それから、私がしばらくアメリカへ行って帰ってきたときに、楠瀬さんは住宅公団へ移られたけれども、それから私は都市計画学会で楠瀬さんともいろいろおつき合いしてもらっていましたが、いつもにこにこして、「都市計画がもうちょっと世の中に認めてもらえたらいいですね」なんていう話をされていながら、それでも「伊藤さんは若いからがんばってくださいよ」なんて言われて、本当に親しくさせてもらいました。

だから、私にとっては、楠瀬さんが、お役所のつくる都市計画というのはどういう内容であり、そして、どういう力を持ち、なおかつどういう問題点があるか、そういうことを初めてきちんと教えてくれた、実務社会の一番初めのお師匠さんだったという気がします。そういう点で、楠瀬さんが亡くなられて大変残念だけれども、私も、都市計画を世に広めることを、楠瀬さんの意を体して一生懸命やってみたいと思っています。

——終わり——